

A大学の母性看護学実習前における学生の自律的欲求・ 仮想的有能感・学習の動機づけの特徴と男女比較

Self-Esteem, Assumed-Competence, Learning Motivation of the Student in Maternity Science of-Nursing Training Features and gender comparison

小倉由紀子・谷口美智子

Yukiko Ogura and Michiko Taniguchi

要 旨

本研究は、A大学看護学生の母性看護学実習前における自律的欲求・仮想的有能感（他者軽視，自尊感情）・学習の動機づけの特徴を明確にすることである。また，男女を比較することで，各々を高める指導の在り方を探求することを目的とした。方法は自律的欲求尺度，Assumed Competence Scale 2 version(ACS2)，自尊感情尺度，学習動機づけ尺度を使用した。その結果，①母性看護学実習前の自律的欲求は，【自己決定】，【独立】ともに男子学生が女子学生を上回っていた。②仮想的有能感（自尊感情，他者軽視）は，他者軽視傾向は男子学生が高く，自尊感情尺度の平均も高かった。男子学生は，他者軽視で自尊感情も高いという「全能型」に類型され，女子学生は，他者軽視が低く自尊感情が高い「自尊型」に類型された。③学習の動機づけは女子学生が内発的調整・同一的調整・取り入れ調整で高く，「勉強しないと教師に叱られるから」「他人に勉強しろと言われるから」の外部調整のみ男子学生が高かった。これらのことから，男女各々の特徴を理解し魅力ある実習環境をめざし，母性看護学の講義・演習に努めていきたい。また，教員・実習調整者との関係性の安定や母子との対人関係の構築の良否が学生の実習意欲を左右するため，受け持ちケースの選定を慎重に行うことが重要である。さらに，自尊感情や自己決定力を高める学習環境を育む指導方法を今後も教員が意識していく必要がある。

キーワード：母性看護学実習，看護学生，自律的欲求，仮想的有能感，学習の動機づけ

I. はじめに

近年の母性看護学実習の現状は，分娩件数の減少やハイリスク妊娠・分娩の増加により受け持ちケースの選択に苦慮している状況である。また，在院日数が初産婦で7日，経産婦で6日と短く，土日や帰校日を除くと最大4日の受け持ち期間の中，実習目的の内容をすべて到達することは困難を生じやすい。

A大学の母性看護学実習は，11月～12月に

2週間3クールで行っている。1クールは27名で，岐阜県2施設，愛知県と長野県各1施設，計4施設でそれぞれ6～7名で，うち男子が1～2名含まれている。

実習内容は外来実習や母親学級の見学，分娩室実習，産褥や新生児実習を行っているが，少子化と産婦人科病棟の閉鎖など社会問題に加え，母性看護学領域を伝統的に女性的職業とする考え方や慣例化された性役割の考えが

いまだ存在し、今後増加する男子学生がどのように実習を展開していくか、ますます困難な状況になることが予想される。

現在の実習状況は、女子学生は興味・関心が高く積極的に実習している傾向にあるが、男子学生は、ケア時の羞恥心の対象への配慮のため、時々所在無く時間を過ごしている姿が見られることや異性である対象との関係の在り方について性差を意識することが多く、「不安が大きい」や「辛い」など男子学生から表出されていることも、これまでの研究報告から明らかになっている。(荒川, 2007; 天野・五影・増田, 2006; 伊藤・松井・大野, 2008).

また、卒業後に母性看護学領域に就職することや、助産師への進路が閉ざされている我が国の状況からも、男子学生は母性看護学実習に学ぶ意義を見いだせず、学習の動機づけを低迷させていることも否めない状況である(小倉, 2011; 斎藤, 2001; 豊田・岡永, 2001). 今後も男・女看護学生について各々の実習環境の平等性の視点で課題は多い。

しかしながら社会の状況は、ジェンダーフリーへの社会的認識や平成22年には「育メンプロジェクト」が発足し、男性も子育てに参加する社会実現にむけて大きく動き出している。それとともに母性看護学実習でも男子学生に期待は高まってくると予想されるが、このような実習環境の中、学ぶ学生の動機づけの現状は掴めていない。

そこで、A大学母性看護学実習前の学生の学習動機づけを促進するために、以下の尺度を用いて特徴を明確にすることとした。

第1に、学習の動機づけの特徴を知るために Deci, E. L & Ryan, R. Mの自己決定理論を使用する(1985/2000)。この自己決定力を高める方法である自己決定理論は、自律性の欲

求(自分でやりたい)と有能性の欲求(能力を発揮したい)と関係性の欲求(人々と関連を持ちたい)を満たすことで外的な価値が内在化され、より自己決定の高い動機づけを持つようになることと仮定されている。この理論は、学習動機づけを高める要因の一つが自律性と捉える考え方である。学習の動機づけ尺度と自律性欲求尺度で自己決定力が明確にできることになる。

第2に、現代の学生の傾向を知るために、仮想的有能感を使用する(速水, 2011)。この仮想的有能感は、他者をどうみるかという1つの他者評価を基盤にしたものである。他者を軽視する傾向は、自分の能力の自己評価を吊り上げることにつながる。しかしこれは、自分の過去の経験に左右されない思い込みの自己評価ということになるのである。今回は、他者軽視の傾向を抽出するために、他者軽視の高さと自尊感情の高さの組み合わせによる有能感の分類を自尊感情尺度とACS2の他者軽視尺度の2つの尺度から学生の特徴を明確にする(速水, 2004/2006)。

先行研究では、佐藤(2011)が看護学生に望む特徴として、仮想的有能感は低く、また自律性欲求が高く学習動機づけもより自律的な動機づけを持っていることが望ましいとしている。

A大学母性看護学実習前の、学生の特徴を明確にし、今後、自らの学習意志で実習に行くことを決定し(自律性)、妊産褥婦や指導者から肯定的な評価を受けて自分の成長を実感でき(有能性)、妊産褥婦と実質的、感情的な結びつき「自分は受け入れられている」という感覚を持つことにより(関係性)、自律的な動機づけを持つ能力を育む(安藤, 2005/2006)ための基礎的資料としたい。

II. 研究目的

本研究は、A大学看護学生の母性看護学実習前における自律性欲求・仮想的有能感（自尊感情、他者軽視）・学習の動機づけの特徴を明確にすることである。また、男女を比較し、各々を高める指導の在り方を探求したい。

III. 用語の定義

自律性欲求：行動を自ら生起させたい、行動を決定したいという欲求。

自尊感情：自分自身を好きだという気持ちや大切に思える気持ち

仮想的有能感：自己の直接的なポジティブ経験に関係なく、他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚。

IV. 研究方法

1. 調査期間

平成24年11月～25年3月末

2. 研究対象

平成24年度にA大学で母性看護学実習を履修する3年生66名（男子学生12名と女子学生54名）とする。

3. 調査内容

質問紙作成者へ使用許可を願い承諾を得た後に、母性看護学実習の初日オリエンテーション終了時に、学生66名に研究の趣旨を文書で説明し同意書を配付した。同意を得られた学生に対し下記の調査を実施した。また、回収方法は学生自ら回収箱に入れることとした。

(1) 自律性欲求尺度 ➤ 自らの行動を決定し、始発したいという自律性欲求の個人差を測定するために、安藤 (2003) において作

成された自律性欲求尺度を用いる。個人の興味や価値を反映して行動を決定し、自己決定を求める“反映的自律性”を測定する自己決定因子と、他者から影響されることを拒否し、独立した個人であろうとする傾向である“反応的自律性”を測定する独立因子で構成されている。全20項目に対して「あてはまらない1点」「あまりあてはまらない2点」「どちらともいえない3点」「少しあてはまる4点」「あてはまる5点」の5段階で測定する。

(2) Assumed Competence Scale 2 version(ACS2)

➤ Hayamizu・Kino (2004) において作成されたACS2を用いる。仮想的有能感を測定する尺度であり、他者を軽視する傾向を表す11項目より構成されている。各項目に対して「まったく思わない1点」「あまりそう思わない2点」「どちらともいえない3点」「ややそう思う4点」「よく思う5点」の5段階で測定する。さらに典型的な仮想的有能感を持つ個人を抽出するために、以下の自尊感情との組み合わせによる有能感の類型化が行われている。
①他者軽視が低く自尊感情も低い『萎縮型』、
②他者軽視が低く自尊感情の高い『自尊型』、
③他者軽視が高く自尊感情が低い『仮想型』、
④他者軽視が高く自尊感情も高い『全能型』
の4つに分類される。

(3) 自尊感情尺度 ➤ Rosenberg(1965)による自尊感情尺度の日本語版（松井・山成・山本, 1982）を用いる。全10項目からなり「あてはまらない1点」「あまりあてはまらない2点」「どちらともいえない3点」「すこしあてはまる4点」「あてはまる5点」の5段階で測定する。

(4) 学習動機づけ尺度▶安藤(2000)の学習動機づけ尺度を使用した。動機づけ尺度は、自己決定理論に基づいて作成され、外的なものによって行動が生起する外的調整、内的な自己や自尊心と関連した圧力により動機づけられる取り入れ的調整、個人的に重要であるとか価値があると受け取られたときに行動が生起する同一化的調整、そして活動そのものに対する興味や関心により行動する内発的調整の4種類の調整を測定する下位尺度より構成される。それぞれ5項目、全20項目からなり、各項目に対して「全然あてはまらない1点」「あてはまらない2点」「どちらでもない3点」「あてはまる4点」「とてもあてはまる5点」の5段階とした。

4. 分析方法

対象者の属性について単純集計を行い、自己決定測定(1)～(4)の回答区分を得点化(5～1点)し計算した。記述統計(平均値と標準偏差、t検定)を求め、統計的解析にはSPSS ver19を用いた。有意水準は5%未満とした。

5. 倫理的配慮

倫理的配慮については、実習オリエンテーションの当日に調査への協力を依頼することを明示した。学生に対して、研究の趣旨と以下について文書で説明し、本人から承諾を得た。回収方法は、学生自ら回収箱に入れることとした。本人のデータや質問紙は匿名性を確保し、この研究の目的以外には使用しないこと。本研究への参加は自由意志であり、途中で参加協力を中断することもできることや研究を拒否することによって成績など不利益を被らないことを強調し説明した。なお、本

研究は、A大学研究倫理審査会の承認を得て実施した。

V. 結果

調査協力の同意が得られ、回収箱に投函してもらった結果、63名より回答を得られた(回収率95.4%)。男子学生は12名100%と女子学生は51名94.4%であった。

1. 自律性欲求について

自律性欲求尺度(表1)の平均値は、自己決定では全体 3.67 ± 0.88 で、男子学生が 3.88 ± 1.00 、女子学生が 3.61 ± 0.84 であった。独立では全体 3.01 ± 0.93 で、男子学生が 3.21 ± 1.08 、女子学生が 2.90 ± 1.12 であった。自己決定・独立とも男子学生が高かった。また男女の有意差がみられた項目は、独立で「自分の考えや行動が他人と違っていても気にならない」という項目において、男子学生 3.42 ± 1.56 が、女子学生 2.63 ± 1.13 より高かった($p < .05$)。また、各尺度の信頼性の検討としてCronbachの α 係数より内的整合性を求めたところ自己決定は.71、独立は.68であった。

2. 自尊感情と他者軽視について

自尊感情尺度(表2)では、全体 3.12 ± 0.94 で、男子学生が 2.89 ± 1.10 、女子学生が 2.67 ± 0.90 であった。男女で有意差がみられた項目は、「だいたいにおいて自分に満足している」という項目で、男子学生 3.08 ± 1.08 が、女子学生 2.37 ± 0.82 より高かった($p < .05$)。ACS2他者軽視尺度(表2)では、全体 2.47 ± 0.92 で、男子学生が 2.87 ± 1.08 、女子学生が 2.37 ± 0.86 であった。男女で有意差がみられた項目は、「知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い」という項目におい

て、男子学生 3.33 ± 0.78 が、女子学生 2.53 ± 0.88 より高かった ($p < .01$)。「他の人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる」という項目において、男子学生 3.00 ± 1.04 が、女子学生 2.31 ± 0.86 より高かった ($p < .05$)。「他の人を見ていてダメな人だと思ふことが多い」という項目において、男子学生 2.75 ± 1.14 が、女子学生 1.92 ± 0.69 より高かった ($p < .05$)。自尊感情も男子学生が高く、他者軽視も男子学生が高かった。また、各尺度の信頼性の検討としてCronbachの α 係数より内的整合性を求めたところ、自尊感情尺度は.87で、ACS2は.88で信頼性は高かった。

3. 学習の動機づけについて

学習の動機づけ尺度(表3)は自律的動機づけの内発的調整が、全体 3.14 ± 0.89 で、男子学生が 2.86 ± 1.02 、女子学生が 3.21 ± 0.84 であった。男女で有意差がみられた項目は、「授業の内容が楽しいから」という項目において、女子学生 3.41 ± 0.66 が、男子学生 2.92 ± 1.08 より高かった ($p < .05$)。同一的調整は、全体 4.07 ± 0.80 で、男子学生が 3.51 ± 1.05 、女子学生が 4.20 ± 0.68 で女子学生が高かった。男女で有意差がみられたものは、「自分のためになると思うから」という項目において、女子学生 4.27 ± 0.56 が、男子学生 3.58 ± 0.99 より高かった ($p < .05$)。「勉強すべき大切な内容だと思うから」という項目において、女子学生 4.14 ± 0.63 が、男子学生 3.67 ± 0.65 より高かった ($p < .05$)。「勉強内容が将来役に立つと思うから」という項目において、女子学生 4.25 ± 0.68 が、男子学生 3.33 ± 1.15 より高かった ($p < .05$)。「希望する職業に必要なだから」という項目において、

女子学生 4.20 ± 0.77 が、男子学生 3.33 ± 1.23 より高かった ($p < .05$)。また統制的動機づけの取り入れ調整は、全体 3.52 ± 0.91 で、男子学生が 3.05 ± 1.07 女子学生が 3.63 ± 0.84 で女子が高かった。男女で有意差がみられたものは、「よい成績を取りたいから」という項目において、女子学生 3.47 ± 0.92 が、男子学生 2.33 ± 1.23 より高かった ($p < .001$)。外的調整は、全体 2.54 ± 1.06 で、男子学生が 2.64 ± 1.21 、女子学生が 2.52 ± 1.03 であった。外的調整のみ男子が高かったが有意差は見られなかった。また、各尺度の信頼性の検討としてCronbachの α 係数より、内的整合性は確保できているといえた。

VI. 考察

1. 自律性欲求尺度得点にみられるA大学看護学生の自律性欲求の特徴と男女比較

今回の調査結果において、自律的欲求尺度の【自己決定】、【独立】ともに男子学生が女子学生を上回っていた。このことは母性看護学実習においてA大学の男子学生は、自らの行動を決定したい気持ちが高く、専門職者になるという目的意識をもって母性看護学実習に臨んでいることがうかがえる。しかし、【自己決定】について、自分で考えてやろうと思うが、現実の実習に介入や実施できることが少なく葛藤が生じる場合は、うまく適応できず自律を妨げる結果となる可能性があることも留意しなければならない。特に、男子学生にとって、看護の理想と現実のギャップを母性看護学に感じることを教員は理解し、達成・向上意欲の低下に繋がらないような指導の在り方が重要である。このような意欲の低下を回避するために、実習前に、母性看護学の講義・演習の中で、実習で起こりうる状

況を事前に説明し、学生が起こりうる状況を予測し想定内と受け止めるように支援する。また、目的意識を見失わず意欲を向上できるように学生に教育的に関わる方法を教員と指導者が連携し、今後も検討していく必要があると考えられた。

また、【独立】についても、女子学生より男子学生が高く、男女で有意差が見られた項目は「自分の考えや行動が他人と違ってても気にならない」で、男子のほうに個人主義が高い傾向にあると考えられた。これは他者から影響されることを拒否し、独立した個人であろうとする男子学生の意識の強い現れであると考えている（佐藤，2011）。母性看護学で女性の気持ちや母親の考え方を学ぶ中、子育てをするのは女性だけでなく、男性も重要で、男性の気持ちや父親の考え方に視点が向き、イメージする中、男性の視点に立って実習を行うことの重要性を強調しているのであると推測できる。指導の在り方としては、理解しづらい女性の視点ばかりを説明するのではなく、家族や男性として独立した男性視点の介入方法を深めていける方向へと導くことが重要であると考えられる。

2. 自尊感情と他者軽視尺度得点にみられるA大学看護学生の仮想的有能感の特徴と男女比較

A大学看護学生の他者軽視傾向は高く、自尊感情尺度の平均も高かった。速水ら（2004，2006）は仮想的有能感の典型、すなわち自信や高い自己評価に裏付けられない他者軽視傾向を抽出するために、他者軽視の高さと自尊感情の高さを組み合わせにより有能感の分類を行ったが、それによると男子学生は、他者軽視で自尊感情も高いという「全能型」に類

型される学生が多かった。この「全能型」を示すものは、自分のことには関心が強いが、他人のことには関心が薄いと考えられている。また、仮想的有能感の高い人ほど怒りの感情を表出しやすく、協調性が低いことは、湯原（2007）も確認している。仮想的有能感を持つと学校では地道に学習しない傾向にあり、特にA大学では、男子学生にその傾向が伺えた。また、女子学生は、「自尊型」に類型され、母性看護学の内容に共感性・協調性があることが考えられた。将来、妊娠・出産・産褥を経験するのは女性であり女子学生は母性看護学実習を身近に感じているといえる。さらに、速水（2006）は仮想的有能感がネガティブな人間関係の経験が多いほど高くなるとしている。これらの傾向を踏まえ教員は、学生を取り巻くすべての人の関わり方が仮想的有能感には大きく影響すること、個人的な出来事に対して怒りを回避させることができるような方法を考えることや他者への不満を減少させるために、親密なコミュニケーションを続けることに留意し関わっていくことが特に男子学生には重要である（伊田，2008；速水・松本・山本，2008）。今後は、学生が成功体験を増やす授業の検討により自尊感情を高め、他者尊重の姿勢を育む教育方法を考えていきたい。男女で有意差がみられた項目は、男子学生の他者軽視傾向の表現が多く、他者軽視が強い要因の一つとして、対人関係の希薄化を速水（2006）は指摘している。その場合、親しい人間関係を喪失し、孤立すればするほど他者を軽視する行動をとるようになることを示している。男子学生が、孤立しない実習環境への事前の配慮が必要である。

3. 学習動機づけ尺度得点にみられるA大学看護学生の学習動機づけ特徴と男女比較

学習の動機づけは女子学生の方が高く、特に、同一的調整はかなり女子が高かった。同一的調整は、ある行為を目標や成長に必要なだからやり続ける状態といわれている(安藤, 2000)。これは、女子学生は母性看護学実習を将来的にも必要なものと考えている。しかし、男子学生は、外的調整のみ高かった。この外的調整は、ある行為は報酬を得、懲罰を避けるためにやり続けている状態で、佐藤(2011)の先行研究と比較すると外的調整のみ高い傾向は特徴的であるといえる。この傾向では、「勉強しないと教師に叱られるから」や「他人に勉強しろといわれるから」など、他者のためにやっている、やらされているという感覚があり、自分にとって母性看護学実習が必要であるという認識は女子と比較し低いことが考えられ、単位取得のために必要な科目という認識であることが理解できた。また佐藤(2011)は、看護学生の学習動機と学習意欲の研究において、看護学系の学生は他の学部 비해、授業にもよく出席し積極的に学習を行っていることを示している。これらのことは、女子学生にとっては同様の結果であることが示され、将来看護職に就くという明確な目的目標を持ち、さらに近い将来母親になるという意識から学習の動機づけが女子学生は高まっていると言える。

しかし、男子学生の場合は、看護職に就くという目的は女子学生と同じであっても産科に勤務することなく、直接今後の仕事に関連はないと考えがちなことや受け持ちが母親のため、過去の自分の親子関係を振り返ることはあっても、自分の将来を意識することや親になるという意識も高まりにくく、男女で有

意差が見られたと考えられる。この有意差が、男女で動機づけの内容は異なる点であると考えられた。この相違点も配慮した上で、今後は指導方法も検討していく必要がある。

VII. 結論

1. 母性看護学実習前の自律性欲求は、【自己決定】、【独立】ともに男子学生が女子学生を上回っていた。
2. 仮想的有能感(自尊感情, 他者軽視)は、他者軽視傾向は高く、自尊感情尺度の平均も高かった。男子学生は、他者軽視で自尊感情も高いという「全能型」に類計され、女子学生は「自尊型」に類型された。
3. 学習の動機づけは女子学生が内発的調整、同一調整、取り入れ調整で高く、男子学生は外的調整のみ高かった。

男子学生にとって母性看護学実習前は、興味・関心が駆り立てられることが少なく、自律性の欲求・有能性の欲求・関係性の欲求能力を持っていてもそれを発揮できないことが示唆された。今後は、男女各々の特徴を理解し魅力ある学習環境をめざし、母性看護学の講義・演習・実習に努めていきたい。特に母性看護学実習は、男子学生にとって孤立的な環境と表現されるため、教員・実習調整者との関係性の安定や母子との対人関係の構築の良否が学生の実習意欲を左右するため、受け持ちケースの選定は慎重に行うことが重要である。さらに、自尊感情や自己決定力を高める学習環境を育む指導方法を今後も教員が意識していく必要がある。

VIII. 研究の限界と今後の課題

本研究の対象は、1大学の学生のみを対象とし男女の学生数にも偏りが見られたため、

全体の結果にも影響が示されたと考えている。また、実習開始前のオリエンテーション時に実施したため、信頼性にも限界がある。今後はエビデンスレベルを高め、量と質の両面から母性看護学実習における学生の検証をさらに積み重ねていきたい。

謝辞

本研究の主旨をご理解していただき、ご協力くださいました研究協力者の皆様に深く感謝いたします。なお、本研究は、2013年、第15回日本母性看護学会学術集会で発表したものに加筆・修正をしたものである。

【文献】

- 荒川直子 (2007). 母性看護学実習において男子学生が経験する性差にかかわる困難. 看護教育, 123-125.
- 安藤史高 (2000). 重視する英語技能の生徒-教師間での不一致・授業に対する不満と英語学習の動機づけとの関連. 名古屋大学教育発達科学研究科紀要, 47, 185-196.
- 安藤史高 (2003). 自律性欲求とクリティカルシンキング志向性との関連. ころとことば, 2, 51-59.
- 安藤史高 (2005). 大学コミットメントと自律性欲求・学習動機づけとの関連. 一宮女子短期大学紀要, 44, 91-99.
- 安藤史高 (2006). 自立性欲求と仮想的有能感との関連について. 一宮女子短期大学紀要, 5, 121-128.
- Deci, E. L. & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. Plenum, New York.
- 速水敏彦 (2011). 仮想的有能感研究の展望. 教育心理学年報, 50, 176-186.
- 速水敏彦, 木野和代, 高木邦子 (2004). 仮想的有能感の構成概念妥当性の検討. 名古屋大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達学, 51, 1-8.
- 速水敏彦 (2006). 他人を見下す若者たち. 講談社, 現代新書, 東京.
- 伊藤千恵, 松井幸子, 大野洵子 (2008). 男子学生の母性看護学実習における教育的配慮の考察. 群馬パース大学紀要, 6, 81-89.
- 伊田勝憲 (2008). 仮想的有能感と学習への動機づけ. 日本発達心理学会第19回大会発表論文集, 521.
- 厚生労働省 (2013-6-23): 男女共同参画社会基本法制定
<http://law.e-gov.go.jp/html/dat/H11/H11H0078.html>
- 厚生労働省 (2013-6-20): 育メンプロジェクト発足式
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000000725v.html>
- 増田昌恵, 天野順子, 五影靖子 (2006). 男子学生の母性看護学実習前後における意識調査-今後の実習のあり方の検討. 看護教育, 75-77.
- 小倉由紀子 (2013). 母性看護学実習における学生のストレス度と気分の変化の男女比較. 中京学院大学紀要, 3, 43-50.
- Ryan, R. M. & Deci, E. L. (2000). self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation social development and well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- Rosenberg, M. (1965). Society and the adolescent self-image. *Princeton Univ. Press*.
- 佐藤美佳 (2011). 看護学生の仮想的有能感と自律性欲求・学習動機づけとの関連. 八戸短期大学紀要, 34, 87-109.

- 斎藤祥乃 (2001). 男子学生の母性看護学実習の一考察. 母性衛生, 42 (1), 230-241.
- 豊田裕美子, 岡永真由美 (2001). 男子学生の母性看護学実習指導に関する文献的考察. 神戸市看護大学紀要, 15, 74-79.
- 湯原沙衣 (2007). 自尊感情と他者軽視傾向の関係が感情表出に及ぼす影響について. 臨床教育心理学研究, 33(1), 65.
- 山本真理子, 松井豊, 山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-68.
- 山本将士, 速水敏彦, 松本麻友子 (2008). 仮想的有能感と対人関係と関係 (2). 教育心理学, 50, 247.

A大学の母性看護学実習前における学生の自律的欲求・仮想的有能感・学習の動機づけの特徴と男女比較

表1. 自律性欲求尺度の平均値・α係数

	平均値[SD]	合計平均値[SD]	α係数	男子平均値[SD]	男子合計平均値[SD]	女子平均値[SD]	女子合計平均値[SD]	
自己決定	1. 周りから反対されても自分がやりたいことをしたいと思う	3.33 [1.16]		3.75 [1.42]		3.24 [1.01]		
	9. 自分のことは自分で決めたいと思う	3.95 [0.70]		4.08 [0.79]		3.92 [0.69]		
	10. 自分で決めたことには責任を持つと思っている	3.97 [0.62]		3.83 [0.83]		4.00 [0.56]		
	12. 自分でいろいろ考えて行動する方が好きだ	3.49 [0.93]	3.67 [0.88]	0.71	3.92 [1.08]	3.88 [1.00]	3.39 [0.87]	3.61 [0.84]
	13. 自分で決めたことをやる方が、やる気が出る	3.87 [0.81]		4.00 [0.95]		3.84 [0.78]		
	14. 自分が何をしたらよいか考えるのは面倒だ	3.11 [0.98]		3.25 [1.21]		3.08 [0.93]		
	16. 自分が興味を持ったことは一生懸命やることができる	4.02 [0.90]		4.17 [0.93]		3.98 [0.90]		
	20. 大事なことは誰かほかの人にきめてもらいたいと思う	3.59 [1.01]		4.08 [0.79]		3.47 [1.03]		
	独立	2. 自分の考えや行動が他人と違っていても気にならない	2.78 [1.25]		3.42 [1.56]		2.63 [1.13]	
3. 他人の意見が対立した時には、自分の意見を通そうとする		2.52 [0.85]		2.75 [0.96]		2.47 [0.83]		
8. 他人の言うことがたとえ正しくても、反論したくなる		2.16 [0.90]		2.42 [0.79]		2.10 [0.92]		
4. 自分がいいと思うのであれば、他人の意見は気にしない		2.37 [0.95]	3.01 [0.93]	0.68	2.58 [1.16]	3.21 [1.08]	2.08 [0.74]	2.90 [1.12]
5. 他人の誰かに指図されるのは嫌だ		3.06 [1.13]		3.33 [1.37]		2.80 [0.89]		
7. 他人の意見や流行を取り入れることが多い		3.83 [0.83]		3.83 [0.83]		3.83 [0.83]		
17. 一人で決められないときには誰かの意見を聞きたくなる		4.40 [0.63]		4.17 [0.93]		4.45 [0.54]		
								**p<0.05

表2. 自尊感情尺度及び他者軽視尺度 (version2) の平均値・α係数

	平均値[SD]	合計平均値[SD]	α係数	男子平均値[SD]	男子合計平均値[SD]	女子平均値[SD]	女子合計平均値[SD]	
自尊感情尺度	1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である	3.19 [0.94]		3.00 [0.85]		3.24 [0.97]		
	2. いろいろな良い素質を持っている	2.83 [0.85]		2.92 [0.90]		2.80 [0.85]		
	3. 敗北者だと思ふことがよくある◇	3.05 [1.05]		3.08 [1.31]		2.92 [0.98]		
	4. 物事を人並みには、うまくやれる	2.90 [0.92]		3.08 [1.00]		2.86 [0.92]		
	5. 自分には自慢できるところがない◇	3.54 [0.89]		2.50 [1.08]		2.45 [0.86]		
	6. 自分に対して肯定的である	2.78 [0.83]	3.12 [0.94]	0.87	2.83 [1.19]	2.89 [1.10]	2.76 [0.74]	2.67 [0.90]
	7. だいたいにおいて、自分に満足している	2.51 [0.91]		3.08 [1.08]		2.37 [0.82]		*
	8. もっと自分自身を尊敬できるようになりたい◇	3.98 [0.85]		2.33 [0.99]		1.98 [0.81]		
	9. 自分は全くダメな人間だと思ふことがよくある◇	3.29 [1.11]		3.00 [1.41]		2.65 [1.04]		
	10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ◇	3.14 [1.07]		3.17 [1.23]		2.76 [1.04]		
他者軽視尺度	1. 自分の周りには気の利かない人が多い	2.22 [0.92]		2.50 [1.24]		2.16 [0.83]		
	2. 他人の仕事を見てると手際が悪いと感じる	2.62 [1.00]		3.17 [1.34]		2.49 [0.88]		
	3. 話し合いの場で、無意味な発言をする人が多い	2.44 [0.83]		2.83 [0.94]		2.35 [0.80]		
	4. 知識や教養がないのに偉そうにしている人が多い	2.68 [0.91]		3.33 [0.78]		2.53 [0.88]		**
	5. 他人に対して、なぜこんな簡単なことがわからないのだろうと感じる	2.44 [0.92]		3.00 [1.04]		2.31 [0.86]		*
	6. 自分の代わりに大切な役目を任せられるような有能な人は、私の周りに少ない	2.03 [0.78]	2.47 [0.92]	0.88	2.42 [0.90]	2.87 [1.08]	1.94 [0.73]	2.37 [0.86]
	7. 他人を見ていて「ダメな人だ」と思ふことが多い	2.08 [0.84]		2.75 [1.14]		1.92 [0.69]		*
	8. 私の意見が聞き入れてもらえなかった時、相手の理解力が足りないと感じる	2.13 [0.81]		2.00 [0.60]		2.16 [0.86]		
	9. 今の日本を動かしている人の多くは大した人間ではない	2.62 [1.14]		2.92 [1.51]		2.55 [1.05]		
	10. 世の中には努力しなくても偉くなる人が少なくない	2.71 [1.06]		3.25 [1.22]		2.59 [1.01]		
	11. 世の中には、常識のない人が多すぎる	3.22 [0.94]		3.50 [1.16]		3.16 [0.88]		
							**p<0.01 *p<0.05	

表3. 学習動機づけ尺度の平均値・α係数

	平均値[SD]	合計平均値[SD]	α係数	男子平均値[SD]	男子合計平均値[SD]	女子平均値[SD]	女子合計平均値[SD]	
自律的動機づけ	1. 授業の内容が楽しいから	3.32 [0.77]		2.92 [1.08]		3.41 [0.66]		*
	12. 新しい知識を得るのが楽しいから	3.59 [0.92]	3.14 [0.89]	0.81	3.33 [1.23]	2.86 [1.02]	3.65 [0.84]	3.21 [0.84]
	18. 勉強することが楽しいから	2.52 [0.99]		2.33 [0.77]		2.57 [1.04]		
統制的動機づけ	7. 今、勉強しておかないとあとで困ると思うから	4.05 [0.88]		3.67 [1.23]		4.14 [0.77]		*
	8. 自分のためになると思うから	4.14 [0.71]		3.58 [0.99]		4.27 [0.56]		*
	13. 勉強するべき大切な内容だと思ふから	4.05 [0.65]	4.07 [0.80]	0.75	3.67 [0.65]	3.51 [1.05]	4.14 [0.63]	4.2 [0.68]
	14. 勉強内容が将来役に立つと思ふから	4.08 [0.86]		3.33 [1.15]		4.25 [0.68]		*
	15. 希望する職業に必要だから	4.03 [0.93]		3.33 [1.23]		4.20 [0.77]		*
統制的動機づけ	2. 勉強しないと不安だから	3.79 [0.67]		3.58 [0.79]		3.84 [0.64]		
	17. 良い成績を取りたいから	3.25 [1.07]	3.52 [0.91]	0.67	2.33 [1.23]	3.05 [1.07]	3.47 [0.92]	3.63 [0.84]
	19. 学生なので、勉強するのが当たり前だから	3.52 [1.01]		3.25 [1.21]		3.59 [0.96]		
	3. 勉強しないと親がうるさいから	2.38 [1.12]		2.25 [1.28]		2.41 [1.09]		
	4. 勉強しないと教師に叱られるから	2.81 [1.03]	2.54 [1.06]	0.78	3.00 [1.12]	2.64 [1.21]	2.76 [1.02]	2.52 [1.03]
	2.44 [1.04]		2.67 [1.23]		2.39 [1.00]			
								***p<0.001 *p<0.05